サンタ・テレサと書物
-「良い書物」の解釈をめぐる問題-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学国際日本学部 公開日: 2020-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20677

【研究論文】

サンタ・テレサと書物

–「良い書物」の解釈をめぐる問題–

The Meaning of the “Good Books” in Saint Teresa of Avila

田中　恵
TANAKA, Megumi

はじめに

サンタ・テレサ（Santa Teresa, 1515-1582、以下テレサ）はスペインのアビラ（Ávila）に誕生した神秘家である。カルメル修道会に入った後、同会を改革し、スペイン各地に修道院を建立した。また、テレサには多くの著作物があり、彼女の作品は16世紀に隆盛したスペイン神秘文学に分類される。テレサが執筆を行ったのは、女性が公的な教育を受ける機会がほとんどなかった時代であり、彼女は家の中で読み書きを習得したと考えられている[1]。

作中では『聖ヒエロニムスの書簡』（V3,7[2]）や聖アウグスティヌスの『告白』（V9,7）など、彼女が手にした書名が挙げられている。しかしその一方で、テレサは具体的な書名は記さずに、「祈りの本」（libros de oración, 1M1,5）や「カスティーリャ語の本」（libros de romance, V26,5）、「小さな本」（libro pequeño, F7,1）といった形で書物を言い表すこともしている。

テレサの著作で最初に言及される書物は「良い書物」（buenos libros, V1,1）である。彼女の生い立ちから50歳頃までの出来事が綴られた『自叙伝』（*Libro de la vida*）によれば、テレサの父親は「良い書物」の熱心な読者であり、子供たちのためにスペイン語で書かれた良い書物を家に置いていたという（V1,1）。そして、父親が読んでいたこの「良い書物」はこれまで「信心書」（libros de devoción）や「霊的な書物」（libros espirituales）と理解されてきた[3]。だが、「信心書」と考えるための理由は乏しいのである。「良い書物」という語はテレサの全作品中、『自叙伝』以外ではほとんど使用されず、全40章からなる『自叙伝』では第1章から第6章までの間のみに現れる。この部分にはテレサの幼少期から青年期までが叙述されており、「良い書物」の解釈は『自叙伝』冒頭の内容を正確に理解するためだけでなく、テレサの実像を解明するうえでも重要となる。そこで本稿では、『自叙伝』における「良い書物」の意味について改めて考え、従来の解釈の問題点を指摘する。

1 Steggink, Otger., ed. (1986). “Introducción”, Santa Teresa de Jesús. *Libro de la vida*. Castalia, Madrid（以下、CST）, p.16.

2 引用は Barrientos, Alberto., ed. (2000). Santa Teresa de Jesús. *Obras completas*. Editorial de Espiritualidad（以下 EDE）, Madrid により、東京女子カルメル会訳、福岡女子カルメル会、高橋テレサ訳を参照した。V: *Libro de la vida*（『自叙伝』）, M: *Las moradas*（『霊魂の城』）, F: *Libro de las fundaciones*（『創立史』）, Cs: *Las constituciones*（『会憲』）。なお、V3,7 は『自叙伝』第3章の7を、1M1,5 は『霊魂の城』第1の住まい、第1章の5を指す。

3 CST, p.95, n.2; Mediavilla, Fidel Sebastián, ed. (2014). Santa Teresa de Jesús. *Libro de la vida*. Real Academia Española, Madrid.（以下、RAE）, p.5, n.2; García de la Concha, Víctor. (1978). *El arte literario en Teresa de Jesús*. Ariel, Barcelona, p.17.

Ⅰ 『会憲』における「良い書物」

まずテレサの著作物全体において「良い書物」という語がどのくらいの頻度で現れるのかを確認する。この言葉は『自叙伝』で 6 回、『完徳の道』(*Camino de perfección*)、『霊魂の城』(*Las moradas*) ではそれぞれ 1 回ずつ使われ、『創立史』(*Libro de las fundaciones*) では 1 度も使用されていない。上記 4 つの主著以外では『霊的報告』(*Cuentas de conciencia*)、『会憲』(*Las constituciones*) で各 1 回登場する[4]。これらの中で「良い書物」の意味を探るための手がかりとなるのは『会憲』の記述である。テレサは自ら建立した修道院のために『会憲』を作成し、その中で彼女は修道女たちが読むべき書物にも言及した。

> 修院長は修道院に良い書物があるように心を用いなければならない。特に『カルトゥハノス』(*Cartujanos*)、『フロス・サンクトルム』(*Flos Sanctorum*)、『コンテンプトゥス・ムンディ』(*Contemptus Mundi*)、『オラトリオ・デ・レリヒオソス』(*Oratorio de Religiosos*)、ルイス・デ・グラナダ(Luis de Granada)師やペドロ・デ・アルカンタラ(Pedro de Alcántara) 神父の著書など。このような読書は肉体にとって食物が必要であると同じように、霊魂にとって必要な糧である。(Cs7)

引用文中の書物を確認すると、『カルトゥハノス』(「カルトゥジオ会修士」) は『ウィタ・クリスティ』(*Vita Christi*, Ludolphe de Saxe) を指し、『フロス・サンクトルム』(「聖人の花」) は当時流布していた聖人伝の名称とされる。『コンテンプトゥス・ムンディ』(「世を厭いて」) は『キリストに倣いて』であり、『オラトリオ・デ・レリヒオソス』はフランシスコ会士アントニオ・デ・ゲバラ(Antonio de Guevara)による修道者の祈祷集(初版 1542 年)と考えられる[5]。また、ルイス・デ・グラナダとペドロ・デ・アルカンタラはいずれも祈りに関する書物の著者として知られている。

このように、『会憲』には「良い書物」の具体的な内容が記されており、本来ならばこの情報に基づき、『自叙伝』の「良い書物」も理解できるはずなのだが、両者には大きな違いがある。上述の通り、『会憲』の「良い書物」には聖人伝 (『フロス・サンクトルム』) が含まれるのに対し、『自叙伝』の「良い書物」にはそれが含まれていないのだ。

『自叙伝』の記述に目を向けてみると、テレサが家族について述べた冒頭部分には、彼女が最も親しかった兄との幼少期の思い出が綴られている。「兄弟姉妹が私を神への奉仕からそらせるようなことは少しもありませんでした。私には自分とほとんど年の違わぬ 1 人の兄がいて、2 人はいつも一緒に聖人伝を読んでおりました。私がいちばん愛していたのはこの兄でした」(V1,4)。テレサが幼い頃、聖人伝をともに読んだ兄とはロドリーゴ (Rodrigo) であり、聖人伝に感化された 2 人は殉教のため「モーロ人の土地」(tierra de moros, V1,4) へ向けて出発したものの、途

4 Astigarraga, Juan Luis., Borrell, Agustí., eds. (2000). *Concordancias de los escritos de Santa Teresa de Jesús*, 2vols. Editoriales OCD, Roma.
5 EDE, p.1112, n.22.

中で親戚に遭遇し、家へ連れ戻され、2人の試みは失敗に終わった[6]。引用文中の「聖人伝」（vidas de Santos）を特定することは難しいが、テレサが幼少期から聖人伝を読んでいたことがわかる。

ところが、テレサは同じ『自叙伝』の中で、彼女は成人する頃まで「良い書物」には親しむことがなかったと記しているのだ（no era amiga de ellos, V3,4）。テレサは18歳の頃、父方の叔父の家を訪れ、そこで「良い書物」を読まされるのだが、その時彼女はまだ「良い書物」が好きではなかったという。つまり、『自叙伝』における「良い書物」には聖人伝は含まれないことになる。したがって、『会憲』に記載されている「良い書物」と『自叙伝』の「良い書物」を同一視することはできないのである。このため本稿では両者を区別し、『自叙伝』に登場する「良い書物」にのみ着目する。

Ⅱ　『自叙伝』冒頭の内容

続けて『自叙伝』で「良い書物」がどのように現れるのかを確認しておこう。「良い書物」という語が登場する第1章から第6章ではテレサの幼少期から、彼女がカルメル会の修道院に入った後、20代後半頃までの時期が扱われている。はじめに親や兄弟姉妹への言及があり、父親が「良い書物」を読んでいたことが記されている。成長するにつれ、テレサは親族の者や騎士道小説から悪影響を受け、素行が悪化し、好ましくない交際を持つに至った。そのため、父親はテレサをアウグスティヌス会の修道院へ預けた。ここはテレサが一時的に過ごした場所であり、後に入るカルメル会の修道院からは区別される。アウグスティヌス会の修道院には修道女の他に、テレサのような若い女性も寄宿することができたが、訪問者との面会は厳しく制限された[7]。つまり、父親は外部世界から閉ざされた環境に娘を移したのである。

18歳頃、病が原因で1年半後に修道院を去った後、テレサは父方の叔父を訪ねた。この叔父は「良い書物」を読むことを日課とし、晩年には修道士となった。それまでテレサには「良い書物」を読む習慣はなかったが、彼女は叔父に影響され「良い書物」を読み始め、さらに20歳のとき叔父の妻方の一族が後援していたカルメル会の修道院に自ら志願して入った[8]。

修道女となったテレサは23歳頃体調を崩し、治療のために修道院をいったん去る。そしてこの時期、彼女は再び叔父のもとへ赴き、叔父から書物を渡される。テレサの容態は治療を受けてかえって悪化するものの彼女は一命をとりとめ、カルメル会の修道院へ戻る頃には「良い書物」を非常に好むようになっていたという。『自叙伝』第1章から第6章の内容は以上の通りである。ここまで「良い書物」という語は6回登場するが、これ以降は使われることがない。

このように『自叙伝』最初の6章において、「良い書物」は父親と叔父に関連付けて用いられており、いずれの場合も「信心書」を指すと考えられてきた。

6　CST, p.99, n.15.

7　De la Madre de Dios, Efrén., Steggink, Otger. (1996). *Tiempo y vida de Santa Teresa*. Biblioteca de Autores Cristianos, Madrid, pp.54-55.

8　RAE, p.15, n.12.

Ⅲ 「信心書」の意味

それでは、「信心書」(libros de devoción) とは何か。この語は、より一般的な呼び方である「霊的な書物」(libros espirituales) とも言い変えられ[9]、16 世紀スペインにおいては、スペイン語に翻訳された宗教書と、直接スペイン語で書かれた宗教書の両方を指す。

宗教書はそれまで基本的にラテン語で記され、ラテン語を知る者しか読者にはなりえなかった。しかし、古典文学研究が盛んだったルネサンス期に翻訳作業が進み、スペイン語でも宗教書を読むことが可能になったのである。スペインでは、カトリック改革へ向けてイサベル女王 (Isabel I, 在位 1474-1504) が登用したフランシスコ会士シスネロス (Francisco Jiménez de Cisneros, 1436-1517) のもと翻訳作業が推進された。15 世紀末から 16 世紀初頭にかけてトマス・ア・ケンピスや聖ボナベントゥラ、ジャン・ジェルソン、聖アウグスティヌス、シエナの聖カタリナ、聖ベルナルドゥス、聖ヒエロニムスなどの作品が出版されている。シスネロスは、この他に神学部を中心に据えたアルカラ大学の創設や、全 6 巻から成る多国語対照聖書 (Biblia Políglota, ヘブライ語、カルデア語、ギリシア語、ラテン語) の作成にも携わった[10]。

こうした翻訳の動きとともに、16 世紀後半には直接スペイン語で書かれた宗教書が生み出された。これらはスペイン文学史において「修徳と神秘思想文学」(literatura ascética y mística) に分類される。霊性生活におけるもっとも高い地点を神秘思想 (mística) と考えた場合、そこへ近づくための魂の働き全般が修徳 (ascética) ということになる。つまり、修徳は魂を神秘思想へと導く人間側の準備訓練であり、修徳が理性的な修練であるのに対し、神秘思想は直感的、経験的に与えられるものとされ、修徳を経ずに完徳の頂へ到達することはなく、修徳と神秘思想は互いを支え合っているともいえる。修徳と神秘思想文学の書き手には、神秘体験には触れずに自身の修練についてのみ書く者や、反対に修練は書かずに神秘体験だけを記す者もいる。このため、両者に明確な境界線を引くことは難しく、スペイン文学において神秘家 (místicos) という場合には黄金世紀に宗教文学を著した著者全体を指すことになる[11]。

いずれにせよ、「霊的な書物」(libros espirituales) にはスペイン語に翻訳されたものだけでなく、スペイン語で書かれた宗教書も含まれる。そして、1 世紀以上前からテレサの作品では「良い書物」は常に「信心書」(霊的な書物) を指すと説明されてきた[12]。すでに確認したように、『自叙伝』では「良い書物」という語が父親と叔父に対して使われており、叔父に関してはその説明が当てはまるのだが、父親に関しては必ずしもそうとはいえないのである。以下で叔父、父親の順で従来の解釈を検討していく。

---

9 CST, p.135, n.21; RAE, p.15, n.14; Álvarez, Tomás., ed. (2009). Santa Teresa. *Obras completas*. Monte Carmelo, Burgos (以下、MC), p.33, n.2.

10 Andrés, Melquíades. (1994). *Historia de la mística de la edad de oro en España y América*. BAC, Madrid, pp.153-156.

11 Alborg, Juan Luis. (1981). *Historia de la literatura española Edad Media y Renacimiento*. Editorial Gredos, Madrid, pp.876-877; Groult, Pierre. (1976). *Los místicos de los Países Bajos y la literatura espiritual española del siglo XVI*. Molina, Rodrigo A. trad., Fundación universitaria española, Madrid, p.23.

12 Morel-Fatio, A. (1908) . "Les lectures de saint Therese", *Bulletin Hispanique* 10, p.19. この論文は CST, p.95, n.2; RAE, p.5, n.2; García de la Concha, op.cit., p.17 でも言及されている。

Ⅳ　叔父の「良い書物」

1　叔父が読んでいた書物

テレサは叔父の家を２度訪ねており、次の引用文は１度目の訪問についてである。テレサは父親に入れられたアウグスティヌス会の修道院を出た後、叔父ペロド・デ・セペーダ（Pedro de Cepeda）のもとを訪れた。

> 帰り道に、父の兄弟の家がありました。彼はきわめて慎重で、徳高い人でした。妻をすでに亡くし、主は彼にもご自分に仕えるよう準備をされていました。高齢になって、この叔父はすべての財産を放棄し修道生活に入り、幸福な死を迎えました。神を味わう喜びをいただいていたと私は信じております。この叔父は、私に数日間彼の家に引きとどめました。彼の修業はスペイン語で書かれた良い書物を読むことで、彼はいつも神やこの世のはかなさについて話してくれました。そして読むよう私に言いました。私はこういった種類の本は好きではありませんでしたが、好きなふりをして読みました。（V3,4, 下線部引用者、以下同様）

テレサは父親によって修道院へ預けられた当初、修道女になることを嫌悪していたが[13]、しだいに修道生活に親近感を抱き始める[14]。叔父がテレサに「良い書物」を読ませたのはそのようなときであった。テレサは叔父との滞在を次のように振り返っている。「私は叔父のところには、わずかしかおりませんでした。しかし、読んだり聞いたりした神のお言葉や、聖なる人とともに過ごしたことが、私の心に強い印象を与え、幼い頃から学んだ真理がもっとはっきりわかるようになり、地上のものの無、この世の虚しさ、人生の短さなどを悟りました。もし今私が死んだなら、地獄へ行くのだと思い、おののきました。私はまだ修道生活に入る決心はできていませんでしたが、それが最良で最も安全な身分であることはわかりました。それで私は、この生活に入るために自分を強めようとしだいに決心するようになりました」（V3,5）。そして、テレサは間もなく修道女として生きることが最善だと考え始める。つまり、叔父を通してもたらされた新しい読み物が召命にこたえる基本的な決心をテレサに促したのである[15]。したがって、自身も後にヒエロニムス会の修道士となった叔父が日々読んでいた「良い書物」を「信心書」と理解しても特に問題はないだろう。

2　テレサが叔父の影響で読み始めた書物（1）

さて、テレサは実際に修道女になるかどうか３か月ほど逡巡するのだが、彼女がこの時期のことを記した部分で初めて「良い書物」の具体例が挙げられる。

---

13 V2,8: yo estaba entonces ya enemiguísima de ser monja, V3,1: la gran enemistad que tenía con ser monja, V3,2: todavía deseaba no fuese monja.
14 V3,2: ya tenía más amistad de ser monja.
15 García de la Concha, op.cit., p.54.

私は熱をともなうひどい失神に襲われました。私は常に健康には恵まれていませんでした。その頃すでに良い書物の友であったことが私を元気づけました。私は聖ヒエロニムスの書簡を読んでいましたが、とても勇気づけられ、父に自分の召命について話そうと決心をしました。（V3,7）

引用文では「良い書物」に対する大きな変化がみられる。テレサは叔父に「良い書物」を読まされた時点では「良い書物」が好きではなかった（no era amiga de ellos, V3,4）。だが、修道女になることを決意したときには「良い書物」がすでに好きになっていた（ya amiga de buenos libros）。そして、後にヒエロニムス会士となった叔父を通して読み始めた「良い書物」の 1 つが『聖ヒエロニムスの書簡』（スペイン語訳初版、1520 年）であり、これは先ほど述べた霊的な書物の 1 つに数えられる。このように、テレサが叔父に感化されて読み始めた「良い書物」が霊的な書物であることからも、先の叔父が読んでいた「良い書物」を「信心書」とみなすことができる。

3　叔父が与えた書物とテレサが叔父の影響で読み始めた書物（2）

ところで、カルメル会の修道院に入った後、テレサは治療が必要な病気にかかり、修道院を一時的に去った。このとき彼女は再び叔父を訪問している。

前に話したあの叔父が道の途中に住んでいましたが、私が訪ねると 1 冊の本をくださいました。潜心の祈りについて書かれたテルセール・アベセダリオという本でした。この最初の 1 年間は良い書物を読んでいましたので、他の本は読みたくはありませんでした。私に及ぼした害をよく知っていたからです。けれども私はまだ、どのように祈りを進めるのか、どのように潜心するのか、具体的な方法を知りませんでした。それで私はこの本を手にして、大喜びしました。（V4,7）

2 度目の訪問について述べた箇所には叔父がテレサに与えた書物とテレサが叔父の影響で読み始めた書物への言及がある。「良い書物」を読むことが日課だった叔父はこのとき、テレサに『テルセール・アベセダリオ』（*Tercer abecedario*）を与えた。本書はフランシスコ会士ルイス・デ・レオン（Luis de León）[16] による祈りのための書物であり、修徳と神秘思想文学の代表的な著書の 1 つである [17]。したがって、やはり叔父が日課としていた「良い書物」を「信心書」と考えて支障はないだろう。

一方、テレサが最初の 1 年に読んでいたという「良い書物」は「他の本」（otros）に対比され

16 テレサの最初の作品集の編纂者でもある。

17 本書はテレサにもっとも大きな影響を及ぼした霊的な書物のひとつとされる（Álvarez, Tomás., ed. (2006). *Diccionario de Santa Teresa. Doctrina e historia.* Monte Carmelo, Burgos（以下、*DST*）, p.388。また、テレサが所有していたものには書きこみが多く、彼女が本書を師として歩み始めたことがうかがわれる (RAE, p.21, n.30.)。

ている。テレサに害を与えた「他の本」は世俗的な読み物である騎士道小説などを指す[18]。テレサの母親はこれを愛読し、後にテレサも傾倒した（V2,1）。このため、「良い書物」を「他の本」（世俗的な読み物）の対義語と考えれば、「良い書物」を「信心書」と捉えることもできる。実際、テレサはこの時期に「良い書物」を読んでいたにもかかわらず、詳しい祈りの方法を知らずにいた。したがって、彼女が叔父に感化され手にした「良い書物」とは祈りの入門書のようなものであった可能性が高く、引用文の「良い書物」に関しても「信心書」と理解することができる。

4　テレサが叔父の影響で読み始めた書物（3）

さて、『テルセール・アベセダリオ』を受け取って以来、テレサにとって「良い書物」は祈る際に不可欠なものとなった。

> 私は、私のうちに存在する、私たちの最高の宝であり、主であるイエス・キリストをできるだけ眺めようと努めました。これが私の祈りの方法でした。つまり、受難の何らかについて考えるときは、それを私の霊魂内で再現しました。しかし、良い書物を読むことが私の一番の喜びでした。（V4,7）

テレサが祈るときに「良い書物」を必要としたのは、彼女の想像力が乏しく、集中力を持続させることが難しかったためである。テレサによれば「良い書物」なしに祈ることは「群れなす敵と戦わなければならないかのよう」であり、「数多い雑念の矢を受けなければならず」、「心は乱れ、思念は散佚してしまう」（V4,9）のであった。この状態を回避するために、彼女は「良い書物」を読み、そのことが祈りを持つことと直結したのである。テレサが治療を終えてカルメル会の修道院に戻って来たとき、祈りの道を進むテレサは「良い書物」を読むことをこの上なく好むようになっていたという（amiguísima de leer buenos libros, V6,4）。したがって、彼女が祈りのために用いた「良い書物」も「信心書」とみなして問題はないだろう。

以上より、叔父と関連付けて使われている「良い書物」は確かに「信心書」と解釈できることがわかる。しかし、父親に関しても同じように判断することはできるのだろうか。

V　父親の「良い書物」

『自叙伝』で「良い書物」という語は第1章から第6章にかけて計6回現れ、父親に対しては第1章冒頭で1度だけ用いられる。第1章は次のように始まる。「神を畏れ、徳に満ちた両親をいただいた上に、主は私にさまざまな恵みをくださったのですから、私がこれほどおろかな存在でなければ、よい人間になるに十分なものをいただいたと思います。父は良い書物を読むことを大変好みました」（V1,1）。テレサの自筆原稿には句読点がほとんどなく、全集などにおける文の区切り方は校訂者の手に委ねられている。このため、引用下線部の「良い書物」の捉え方は、こ

18 CST, p.118, n.29; RAE, p.21,n.32; MC, p.50, n.17.

の後に続く文章の区切り方によって変わることになる。まず以下に原文を引用し、問題の箇所のみ自筆原稿[19]と同じように句読点をつけずに示した（二重下線部）。

> Era mi padre aficionado a leer buenos libros y así los tenía de romance para que leyesen sus hijos estos con el cuidado que mi madre tenía de hacernos rezar y ponernos en ser devotos de nuestra Señora y de algunos santos, comenzó a despertarme de edad, a mi parecer, de seis o siete años.（V1,1）

句読点の打ち方は大きく 2 通りあり、1 つが hijos の後ろで文を切る方法である（...hijos. Estos con...）。この場合、次の文の主語は estos、動詞は comenzó（波線部）となる。主語が複数形であるため、本来ならば動詞も複数形（comenzaron）になるはずだが、ここでは単数形であり、動詞の形は主語に対応していない。ところが、1588 年に出版されたテレサの最初の作品集の編纂者ルイス・デ・レオンは主語 estos（「これらのもの」）の s を消し去り、単数形 esto（「このこと」）に書き換え、主語を動詞に一致させた[20]。以後、自筆原稿の estos はテレサの書き間違えとみなされ、現在でも estos を esto と記している版がある[21]。hijos に句点を打つと（...hijos. Esto, con...）、全体の訳は次のようになる。

> 父は良い書物を読むことを大変好み、子供たちも読めるようにとスペイン語で書かれた良い書物を持っておりました。このことが、私たちに祈りをさせ、聖母や聖人がたへの信心を持たせようとした母の気遣いとともに、おそらく 6、7 才の頃から、徳高いことがらへと私を目覚めさせました。（V1,1）

2 文目の主語 esto（「このこと」）は「父親が子供たちも読むようにとスペイン語で書かれた良い書物を持っていたこと」を指す。また、述部は「テレサを徳高いことがら（cosas virtuosas）[22]へ目覚めさせた」となる。したがって、テレサを目覚めさせたのは主に父親の行為であって、母親の行為（子供たちに祈らせ、聖人への信心を持たせようとしたこと）はそれに付随するものとして理解される。このため、hijos の後ろに句点を置くことは、父親の「良い書物」が「信心書」であるとする説を補強することにもなる。

しかし、こうした見方がある一方で、テレサの自筆原稿では hijos 語末の s と estos 語頭の e がつながった状態で記されていることから、estos の後ろで文を区切るべきだとの意見がある

19 Presentación y transcripción paleográfica de Álvarez, Tomás. (1990). *Santa Teresa de Jesús. Libro de la vida* Ⅱ. *Autógrafo de la Biblioteca del Real Monasterio de San Lorenzo de El Escorial* (vitrina26). Monte Carmelo, Burgos.

20 正確には estos（「これらのもの」）の単数形は este（「これ」）であり、esto（「このこと」）からは区別される。

21 MC, p.33, n.3.

22 RAE, p.5, n.5.

(...hijos estos. Con...)[23]。この場合、estos（「これらのもの」）は1文目に含まれ、前出の buenos libros（「良い書物」）を指す。そして、2文目は con el cuidado que mi madre tenía と始まるが、これは16世紀特有の書き方であり、現在の語順では el cuidado con que mi madre tenía となる[24]。つまり、2文目の主語は el cuidado（「気遣い」）、動詞は comenzó（「始めた」）となり、主語と動詞はともに単数形で対応し、以下のように訳すことができる。

> 父は良い書物を読むことを大変好み、子供たちもこれらのものを読めるようにとスペイン語で書かれた良い書物を持っておりました。私たちに祈りをさせ、聖母や聖人がたへの信心を持たせようとした母の気遣いが、おそらく6、7才の頃から、私を徳高いことがらへと目覚めさせました。(V1,1)

このように、estos で文を切った場合、母親の行為がテレサを徳高いことがらに目覚めさせたことが明確になる。そして、すでに述べたように、テレサは幼い頃から聖人伝を読んでいたが、これは聖人への信心を抱かせた母親の影響であったと理解することもできる。また、父親の「良い書物」を「信心書」と捉える必要はなくなり、父親は単に「良い書物」が好きだったと読むことができるのだ。

しかしながら、父親の「良い書物」はあくまでも「信心書」を指し、テレサは父親の影響で聖人伝を読み始めたと考えられている[25]。このため、estos の後ろで文が区切られた場合も、母親と聖人伝のつながりは見落とされてしまい、父親が読んだ「良い書物」の解釈が変わることもないのである。

ところが、父親が残した財産目録は「良い書物」が字義通りの意味である可能性を示唆している。テレサの父親は再婚しており、テレサは再婚相手との間に生まれた子供だった。最初の妻が亡くなったときに財産目録が作成され（1507）、この目録にはキケロやセネカ、ウェルギリウスなどの作品を含む書物が10冊ほど記載されている[26]。しかし、それらはいずれも1550年以前に大学図書館や蔵書家の目録の多くに記載された、ありふれた書物であり[27]、「信心書」もわずか数冊しかない[28]。

また、こうした書物を所有していた父親の騎士道小説に対する態度も興味深い。テレサの母親は騎士道小説に傾倒し、その影響で娘のテレサもこれに夢中になった。しかし、父親は騎士道小

23 RAE, p.5, n.3.
24 RAE, p.5, n.4.
25 Bilinkoff, Jodi. (2015). “Teresa de Jesús y los libros: lectora, escritora e inspiradora”. *Actas del Congreso Internacional Teresiano* (22-24 octubre 2014). Salamanca, p.37.
26 目録には次の書物がある。*Retablo de la vida de Cristo; Tratado de la misa; Los siete pecados; De officiis* (Cicerón); un Boecio; *Proverbios* (Séneca); Poemas de Virgilio; *Las trescientas*, *La coronación* (Juan de Mena); *Lunario*. (EDE, p.4, n.2.) 例えば『ルナリオ』(*Lunario*) は、天候の前兆や天体が肉体に及ぼす影響について記した書物であり、どの家にもあったとされる (CST, p.96, n.2)。
27 EDE, p.4, n.2.
28 RAE, p.544(5.2). ただし具体的にどの書物が「信心書」に該当するかは指摘されていない。

説に否定的であった。「父はこのことをひどく嫌っておりましたので、私と母は見つからないようにうまくやらなければなりませんでした」（V2,1）。このため、テレサは父親に隠れて騎士道小説を読んでいたのである。「昼夜を問わず、それも何時間もこのような空しい読書に耽り、それも父の目を盗んでそうしていることを悪いことだと思わなくなっていました」（V2,1）。騎士道小説は当時の倫理学者などからは好ましくない読み物と評され、1531 年には新大陸へ騎士道小説を持ち込むことを禁じた勅令も出されたほどであった[29]。このように、父親の態度は騎士道小説に対する当時の考え方に一致しており、先ほどの財産目録に記載されていた書物は全て、一般に広く所有されたものであったことから、父親の「良い書物」は「16 世紀スペインで良いとみなされていた書物」とも考えられるはずなのである。

だが、父親の「良い書物」は「信心書」を指し、父親の再婚後に「信心書」は増えたと考えられてきた。「テレサの成長期には確実に家にはより多くの信心書や古典文学作品が用意されていた」[30]。テレサの作品の校訂者や研究者は、その根拠として聖人伝や騎士道小説の存在を挙げている。テレサは『自叙伝』の中で、財産目録にはない聖人伝や騎士道小説を読んでいたことを明らかにしているので、父親が再婚し、テレサが生まれた後には信心書も多数所有されたに違いないというのだ[31]。

けれども、『自叙伝』には父親が信心書を愛好するようになったのは、テレサがカルメル会の修道院に入った後だったと読める箇所がある。カルメル会の修道院で暮らし始めて間もなく体調を崩したテレサは、治療のために一時修道院を去り、その後、修道院へ戻った。病状は快方へ向かうが、ちょうどその頃、彼女は他の人を進歩させたいとの衝動に駆られる（V7,10）。そこで、父親に祈りを持つことを勧め、書物を渡しているのだ。「私は父をたいへん愛していたので、私が祈りのうちに見つけたと信じた宝を父にも持ってほしいと思いました。なぜなら、この世で祈りほど素晴らしいものはないと思ったからです。それで、私はいろいろ考え、父を祈りの道に導く方法を探りました。そして、父に書物を渡しました」（V7,10）。その後、父親はテレサ以上に熱心に祈りの道を歩んだ。それまで父親にどの程度祈る習慣があったのかは定かではないが、テレサがこのとき父親に渡した書物が祈りに関するものであるのは明らかであり、父親はテレサが修道院に入った後、信心書に強い関心を示し始めた可能性は高い。このため、テレサの幼少期から父親が好んで読んだ「良い書物」は「信心書」を指すと断言するのは難しいといえる。

それでは「良い書物」は何を指すのか。本節ではまずこの語が最初に現れる文章の区切り方に着目し、信心書に数えられる聖人伝と父親の結びつきは弱いことに触れた。また、財産目録にあるわずかな信心書は当時広く流布していたものであることも確認した。さらに、父親が騎士道小説を「良くない書物」とみなしていたことから、「良い書物」は文字通りの意味である可能性があることがわかった。そして、父親が「良い書物」に関心を持ち始めた時期などから判断すると、

29 CST, pp.102-103, n.6.
30 RAE, p.544(5.2)
31 RAE, p.544(5.2) ; CST, p.96, n.2.; García de la Concha, op.cit., p.17.

「良い書物」は16世紀に良いと評され、広く所有された「一般書」としての意味合いが強いといえるのではないだろうか。

おわりに

このように、すでに明らかになっていることがらに基づいて判断した場合、叔父の「良い書物」は「信心書」と捉えられるものの、父親の「良い書物」は「一般書」と理解する方が適当であることがわかる。このことは、テレサが異なる種類の書物を同じ語で言い表したことを意味するため、不自然にも思えるが、当時の時代背景が少なからぬ影響を及ぼしているかもしれない。

テレサが生きたのは異端審問の時代であった。異端審問所は、異端者やカトリック教義に反する罪の発見や処罰、予防などを目的とした機関であり、スペインではフダイサンテ（judaizante, 隠れユダヤ教徒）に対処するため1480年に設置された。しかし、問題解決には不十分だったため、1492年にはユダヤ教徒に4か月以内の改宗の勅令を公布し、5万から15万人近い人々がスペイン国外へ出たといわれる[32]。そして、コンベルソ（converso, ユダヤ教からの改宗者またはその子孫）は16世紀に入っても異端審問の対象であり続けた。テレサの父方の祖父は改宗ユダヤ教徒であり、彼女の父親と叔父はコンベルソだった。

さらに、16世紀には禁書目録が作成された。1559年の禁書目録では書物は言語ごとに分類され、ラテン語の書物への刑罰はほとんどみられなかったが、スペイン語による書物には特別の注意が払われ、宗教書は厳しい管理下に置かれた[33]。それらは神秘文学や聖書、宗教書のスペイン語訳である。テレサもこの目録に言及している。「スペイン語で書かれた多くの書物を読むことが禁じられたとき、私は大変悲しみました。なぜなら、そのうちのいくつかは私のためによい気晴らしになっておりましたが、許しのある書物はみなラテン語のものばかりで、私はもう読むことができませんでしたから」(V26,5)。テレサが執筆を開始したのはこの禁書目録が出た直後であった。したがって、テレサはコンベルソである父親と叔父が読んでいた書物を、禁書ではない「良い書物」として慎重に言い表したとも考えられる。

いずれにせよ、父親の「良い書物」を「信心書」と理解するための根拠は乏しいことがわかったが、それにもかかわらず、これを「信心書」と捉える利点はあるのだろうか。テレサの父親が「信心書」の愛好者だったとすることで、敬虔なキリスト教徒としての父親像が浮かび上がるが、すでに述べたように父親はコンベルソであった。

テレサの母親の家系は代々キリスト教徒（旧キリスト教徒）であることが判明しているが、父親の方は旧キリスト教徒ではなかった。テレサの父方の祖父には1485年にトレド（Toledo）でフダイサンテ（隠れユダヤ教徒）として処罰された過去がある。彼は子供たちとともに罪人の恰好をして、7週続けて金曜日にトレドの教会まで行進することを命じられた。当時5才だったテ

32 立石博高編（2000）『世界各国史16　スペイン・ポルトガル史』山川出版社、87頁。
33 Kamen, Henry. (1999). *La Inquisición española, Una revisión histórica*. Morrás, María., trad., Crítica, Barcelona, p.110.

レサの父親もこの行進に加わり、一家はその後直ちにトレドからアビラへ移住したことがわかっている[34]。

テレサの父親の出自に関する資料（訴訟記録[35]）は 1946 年に発見され、明らかになった。しかし、1960 年にこの資料は突如消失し、しかも資料消失の事実は一部の専門家が知る以外は伏せられていた。ようやくこれが出版されたのは、資料が戻った 1986 年のことである[36]。当初、テレサの父方の一族がコンベルソであることは、カトリックの聖人であるテレサにとって不都合な事実とみなされたものと思われるが、現在ではテレサについて論じる際に、彼女がコンベルソであることはほぼ必ず言及される。しかし、父親が好んだ「良い書物」は「信心書」（libros de devoción）を指すと説明することで、コンベルソではあるものの、信心（devoción）深い父親の姿を印象付けることにもなる。したがって、従来の解釈は父親がコンベルソであることと無関係ではないかもしれないのである。

それでは、父親の「良い書物」の解釈の仕方によって『自叙伝』冒頭の理解にどのような違いが生じるのだろうか。これまでのように、「信心書」とみなす場合、テレサの幼少期から父親は信心書を所有し、そのような父親のもとテレサは聖人伝などに親しんだと考えられる。そして、叔父の勧めで「良い書物」を読み始めたテレサは父親の蔵書を手にし[37]、宗教書全般が父親からテレサへ浸透したことになる。一方、これを「一般書」と捉えると、祈りの習慣や聖人への信心に加え、聖人伝を読む習慣は基本的に母親を通してテレサに根付いたと推測される。また、それまで主に一般的な書物に親しんでいた父親は、娘のテレサによって信心書へと目覚めたと考えられる。このように、「良い書物」の捉え方によって、両親がテレサに与えた宗教的な影響力の強さに対する印象が大きく変わるのである。したがって、『自叙伝』における父親の「良い書物」の従来の解釈は改めて見直される必要があるだろう。

参考文献

Alborg, Juan Luis. (1981). *Historia de la literatura española Edad Media y Renacimiento*. Editorial Gredos, Madrid.

Álvarez, Tomás., ed. (2006). *Diccionario de Santa Teresa. Doctrina e historia*. Monte Carmelo, Burgos.

---------, ed. (2009). Santa Teresa. *Obras completas*. Monte Carmelo, Burgos.

Andrés, Melquíades. (1994). *Historia de la mística de la edad de oro en España y América*. Biblioteca de Autores Cristianos, Madrid.

34 DST, pp.931-932.

35 父親を含む 4 人の兄弟が、イダルゴ (hidalgo, 貴族) であることを理由にオルティゴーサで税の支払いを拒み、イダルゴ身分の確認を求めたときのもの。この訴訟記録を通して、一族はもともとイダルゴではなくコンベルソであることがわかった。（坂本宏（2012）「コンベルソの同化戦略：セペダ家のイダルゴ訴訟（1519-1522）」明治学院大学教養教育センター紀要 6（1）、23 頁。）

36 DST, p.931.

37 RAE, p.558(35.24).

Astigarraga, Juan Luis., Borrell, Agustí., eds. (2000). *Concordancias de los escritos de Santa Teresa de Jesús*, 2vols. Editoriales OCD, Roma.

Barrientos, Alberto., ed. (2000). Santa Teresa de Jesús. *Obras completas*. Editorial de Espiritualidad, Madrid.

Bilinkoff, Jodi. (2015). "Teresa de Jesús y los libros: lectora, escritora e inspiradora". *Actas del Congreso Internacional Teresiano* (22-24 octubre 2014). Salamanca, pp.31-50.

De la Madre de Dios, Efrén., Steggink, Otger. (1996). *Tiempo y vida de Santa Teresa*. Biblioteca de Autores Cristianos, Madrid.

García de la Concha, Víctor. (1978). *El arte literario en Teresa de Jesús*. Ariel, Barcelona.

Groult, Pierre. (1976). *Los místicos de los Países Bajos y la literatura espiritual española del siglo XVI*. Molina, Rodrigo A. trad., Fundación Universitaria Española, Madrid.

Kamen, Henry. (1999). *La Inquisición española, Una revisión histórica*. Morrás, María., trad., Crítica, Barcelona.

Mediavilla, Fidel Sebastián, ed. (2014). Santa Teresa de Jesús. *Libro de la vida*. Real Academia Española, Madrid.

Morel-Fatio, A. (1908) . "Les lectures de saint Therese", *Bulletin Hispanique* 10, 17-67.

Presentación y transcripción paleográfica de Álvarez, Tomás. (1990). *Santa Teresa de Jesús. Libro de la vida* Ⅱ . *Autógrafo de la Biblioteca del Real Monasterio de San Lorenzo de El Escorial* (vitrina26). Monte Carmelo, Burgos.

Steggink, Otger., ed. (1986). Santa Teresa de Jesús. *Libro de la vida*. Castalia, Madrid.

坂本宏（2012）「コンベルソの同化戦略：セペダ家のイダルゴ訴訟（1519-1522）」『明治学院大学教養教育センター紀要』6（1）23-37

鈴木宣明監修、高橋テレサ訳（2006）『アビラの聖テレサ「神の憐れみの人生」上・下』聖母の騎士社

立石博高編（2000）『世界各国史 16　スペイン・ポルトガル史』山川出版社

東京女子カルメル会訳（1960）『イエズスの聖テレジア自叙伝』サンパウロ

東京女子カルメル会、福岡女子カルメル会訳（1971）『小品集』ドン・ボスコ社